

1952 Julio

N-ro 1

ETA LITERTUR GAZETO

# LEONTODO

ELDONITA DE OTARU ESP-ASOCIO

# ENHAVO

1. ANTAUPAROLO ..... 3p 山本 昭一郎
2. エスペラント人種について ..... 4p 佳山 やす子
3. 講習会の思い出 ..... 6p 高橋 達治
4. KOREGON ! ..... 9p 山本 昭一郎
5. AKACIOの樹蔭から ..... 11p 中沢 天眼
6. 私はエスペラントを信仰して居る ..... 12p 土田 虎幸
7. Novaj gesamideanoj  
にのぞむもの ..... 13p 前田 幸一
8. エス語の慣用語句 ..... 15p 早川 昇
9. D-to Privat への  
Salutoletelo ..... 23p 山賀 勇
10. 編輯後記 ..... 24p

# ANTAŪPAROLO

Y.

TITOLO については大分苦心したことを書くのも無意義ではない様に思います。titolo のことではいろいろと考えました。Samideanoに会うごとに eldoni gazeton の話をし、またそのtitolo はいかにすべきか考えてもらいました。respondo をくれた人もあり、くれない人もありました。一寸集まっただけでも GLACIFLORO (氷の花), BELA ĜERMO (美しき萌芽), NORDA HOMO (北方人), (北限界)espe=?, KONVALETO (鈴蘭) K.T.P. 個々の意味に面白く首肯出来るものが多いのですが、この gazeto が literatura なものであり、とくに Esp での記述が当然ですから、普通の日本の文藝同人誌とは自ら目的も違い titolo も独特のものであってほしいと思いました。意味も大切だが Esp で口ざわりのよいことも大切でした。LEONTODO も思いつきみだいな偶然さで飛び出してきたものですが、これだと口ざわりもいいし、気持にぴったりとくる所がある様に思われました。今のところこれが決定について反対者はない様ですが、もっと適当したものがあれば変えてもいい位のつもりで居ります。しかし名前まけということもありますから、あまり立派すぎるのは敬遠します。要はその内容を端的に表現していればいいのです。

Leontodo (Dandelion) は春から夏にかけて、土堤に森に路傍に又野原に、あたりを明るくするばかりに陽気にその小さな黄色い花を咲かせます。平凡であるけれど、誰にでも親しまれる愛らしい花。(私はどうしても草とは言えないのです) 幼児が一番最初に印象する花はタンポポではないでしょうか？ 幼ない頃、黄色いタンポポの花を一つ二つと集めては、それで花輪を編んで玉冠のように頭にのせたり、首にかけたリした記憶はどなたにもおありでしょ？ 春になってタンポポが咲かなかったらどんなにかさびしいでしょう。暖かくなってきた五月頃、人々は無意識のうちに眼でたんぽぽをさがすのではないのでしょうか。

Leontodo は宿根草です。この根強い草は、踏まれても踏まれても又立上り、風雪に耐えて、年々歳々必ず花をもたらししてくれるうれしい超りになる herbo。どんな瘦地にもどんな路傍にも咲くのです。タンポポのきれいな人ってないだろうと思います。牛や馬などの草食獣達にさえも愛されているのです。春、郊外に出て、道端の草叢に無数に群生しているタンポポの、菜の花畑さながらに咲き乱れているのを見ると、私は思わずそこに坐り込んでしまいます。私はタンポポこそ平和な花だと思えます。私達がタンポポから会得すべきものがまだあります。その花もやがてしぼんで、こんどは落下傘の様な無数の種子を風にのせて、遠く近くにまき散らします。何百米も遠方に運ばれてゆき、そこに土着する。そんなにも強い伝播力、順應性、根強さ、そして美しさ。

## エスペラント人種について 佳山やす子

私はエスペラント人種というものについて考える。私は時々いろんな人に私達の言葉をプロパガンデイする。或人にすゝめたら「手紙を書くと事好きな人がやることですね」と言った。更に私が語をついで、外国から始めて遙々と自分の許に手紙が届いた時如何に嬉しいかを説明したら「そんな喜ぶなんてさつぱりピンと来ない」と言った。こういう人は親しい人、生れつき私達の範疇にはいらぬ人である。非エスペラント人種である。私自身はエスペラント人種である。

嘗て私が今迄の生活を精算して家に落着くことにした時、何かをしてみたいと思った。それは漠然としてつかみどころがないが、何かの救済が心の内奥に存在していたのである。これからの単調で空虚であろう生活を想って、無為に終らせることなく何かを身につけたいと考えていた。身につけるといふよりも、必然的にせばめられる環境の故に慰安を求めていたのかも知れない。将来おばあさんになって過去を追憶する時、現

在の数年間が全くのブランクで何も思い出せない、たんぼの綿毛のよう  
に吹けば飛ぶようなものであつては困ると思つたのである。個人の生  
活に於て、何時の時代をとりあげても思い出がゆたかに充実してい  
て、追憶が微笑を伴うものであつたらどんなによいだろう。何でもよ  
かつたのだけど、私は語學が好きだつたから英語をはじめた。毎日、高  
大の某先生の許に通つた。然し、そんなのはさつぱり緩慢で非能率的で  
意味のないことに思われて来た時、私の前にエスペラント水クローズア  
ップされた。私は生れながらのエスペラント人種であつたから、勿論す  
ぐに飛込んで、それに浸つて感動した。併し同時に生れながらの *ma-  
jor-siligentia* のために、間もなく熱もさめ、今日の状態になつて少しも  
伸びないけれど、私は私達の言葉を今尚愛していることはたしかである。

外国の近代の著名な小説を読んでも時々、エスペラントという語  
が出てくる。そうすると、異国で親しい友にでも出逢つたように、ほつ  
と胸をつかれ、頬が熱くなり、胸がどきどきしてくるのである。これは  
エスペラントを愛している證據ではないだろうか。過去四年の間に、外  
にあつたエスペラントが習慣となり、今では私自身に交り合つてしまつ  
たのだと思う。ともあれ、近代の小説の中にエスペラントが一オでも出  
てくるのは嬉しいことである。しかも、私が生涯手許に置いておきたい  
と望んでいる二三の感動した小説の中に存在していることは嬉しいこと  
である。たとえ作者が好意をあまり持つてくれなくとも、それは伸び行  
く私達の言葉の存在を私に示してくれるのだから。

外国人との文通は楽しい。時間がかかるので楽しみを引きのばしてく  
れるし、遙々遠い地から私宛てに長い旅をしてくれたのだと思うと、そ  
の手紙のものに「御苦勞様」といいたくなる。遠い外国に住む一人の  
未知の人との間にかもされる友情は、所詮夢のようにはかないものであ  
る。私達はその文通の相手の *adreso* を手に入れて文通をはじめた。そ  
の人の生活や思想を知つて友情が高まつて来ても、一度も出逢つた事も  
なく、今後も永久に出逢はないのだから、その友情も熱烈になれば  
なる程可笑なものだと思ふ。現実に何処かに存在していることはたしか

でも、一目も見ないということは架空の人物に等しい。架空の人物が作る協力の物語、だから私も現実の自分をかくして架空の人物になって手紙の中でよい気分で活躍する。こういうことをだのしんでのだから私はたしかにエスペラント人種である。

エスペラントはまた、日々の生活の流れに中と厚みと、そして重みとらしいという私の願いの幾分かを実現してくれてゐるように私は思うのである。

(15. Junio)

## 講習會の思い出

高橋達治

市役所から図書館へ抜ける道の新緑は何と私に懐かしいものになったことだろう。三年このかたというもの、五月がくれば私は図書館へ通うために幾度も幾度もその下を通る。緑の蔭をそつとその頬に浮かべながら、いそとこの道を横切つてゆく人を私は愛する。此の人達はたゞ生活のために忙しい町の人とは違う。少なくとも——いわば“町”から解放された人達なのだ。何ともいえぬ *tranquileco* といったものを、清らかな瀧を見たときの感じのようなものを、私はこの風景から感ずる。と、此、私はここに来たとき、この時の *sento* に最も近い *melodeo* をかねばならぬ。“*La espero*”——私は聞耳をたて、そしてそれに近く。図書館は裏口から入る。そのことは *neceso* からでもあるがそれ以上に、私に、ふとしたこの図書館への親近感をもたせるからだ。*teamikoj* が私を待っている。本当に私を待っているのだ。階段を上るとき、私は或種のおののきを感じずる。(講習會が初まつたばかりの頃特に強く此を感じずる) それは薄々べらな責任感などによつたものと違う。面もなく非才をおして講師をつとめるという私の *malhonesteco* ばかりによるものでもないようだ。——それ以上の何かだろうか——

今年の講習會は20人の *gesamideanoj* と *amikigi* することが出来た。去年も20人位だった。*S-ano* と *S-animoj* の区別も去年

と同じ位である。唯違っていることは、今年の新しい同志が殆んど休まず最後まで講習会に出てくれたことである。講習について私もいろいろのことを聞いた。— kurso も interparolado も積極的に、出来るとか、出来ないとか、そんなことを疑懼せず、とにかくやれ— などと言われると私は心強い。実際に私がそういう態度であつて、それを支持する S-ano の言葉であれば、勿論私としても反駁することもない。おまけに私には— 私達の Movado についてはすべてであるが— 山賀さんという支柱がある。私はどんな Esp-movado にも山賀さんを頼りにする。むしろ山賀さんに徹底的に従属して行く。殆んど山賀さんの指示のみに従う。それではなければ安心感もできず、やり方の妥当性も得られず、実際に不可能であるからだ。それ故、山賀さんに「君でもよし、やれ」といわれれば、去年の失敗もこりず、一言もいわずに引受けるだけの勇氣が湧いてくるわけである。F-ino T は講師の首なのに出てこられなかった。S-ro H が講師を固辞されたが、御多忙中という理由をぬきにして、私は敢えて「kurso は自力の能力などを疑懼せず、積極的にやれ」という前言を彼等にも反復するだろう。講習の方法について中央では、大抵の場合、interparolado を中心に講義を進めているという話を私は一年前に実際にそれらの人々から聞いた。外国語の講習は当然そうあるべきである。「話す」「聞く」ということは無論「ことば」の根本的な意味で、これを中心にして講義をしなければならぬことは勿論である。ところで実際問題として、講習者の耳と口からだけでエスペラントを理解して貰うことは難しいことである。苟一私自身が interparolado に十分のオがないのだ。それから受講者の方でも、外語の経験が相当あつて interparolado から自然にエスペラントを理解され、その構成をも知るというような人も少ないように見受けられたし、一般にこれを好まぬ傾向がある。だが何よりも、そうして講習を進めるためには時間が不充かである。一週三時間で入道計 24 時間という僅少な時間で、はじめて日本語以外の言葉を勉強する人がその方法で実際に「話し、聞き、書ける」ようになれるということは、はじめからとても私には出来まい

と思われた。とにかく、言葉の構成の理解を——そんなすべての意味で講義の目的の中心を小坂氏の「エスペラント講習用書」の理解という点にもって行ったわけである。しかし、それさえも不十分にしか理解されなかったり、又大切な言葉の習いはじめを余りにも迂曲に学習されたり、間違つてとられたりされたらしたら、その罪は当然私にあるので私がお詫びしなければならぬのだ。

私達は今春丸井で、世界児童画展及びエスペラント展を開いた。そのことを世間の人々がどうみたかは別問題としよう。ただ私達にはできるだけ多くの人々が私達の歩みを理解され、そして出来ればこの歩みに同調して私達の同志になられ、更に私達の集いをより若々しいものにしてほしかつたからである。展覧会場で已に講習会のビラを張つて propagandi した。講習会の初日。私達はおぼつかない 荷でその反応を待った。受講者がぼつぼつと集まつてくる！“やつぱり来てくれた——”そんな歓声が心の中から発してくる。それから講習がはじまつた。或時はさわやかな初夏の空気を会場に一杯にして気持よく講義できた。或時は勤めの後の疲れが会場に向う私の歩みをのろくしたこともあつた。受講される人にもそんな気持を持たれたことでしょう。しかし、ともかくも講習は終りに近付き、与えられた私の devo は拙いながらも遂行されようとしている。この時に私が私の反省において唯のぞむことは、novaj gesamideanoj 諸氏が、この kurso をきっかけとして、本当にこれからエスペラントを勉強され、利用され、決して決して私誓の如き Eterna komencanto に墮さないように努力されることを、また malnovaj gesamideanoj にあつては、新らしい人達の歩みを、あなた達が講習会場に来られて応援下さつた御気持と同様、快よく迎えられ、また今後もずっと、よき助力を惜しまないようにして頂きたい。

一つのテーマから次のテーマへ、頁は次第にめくられる。第五課の練習問題を終る。半数の人は完全に理解されているようだ。講習が一日一日と積つて、もうあとには数頁しかのこらない。次の頁をめくる。すると、紙面の動さに時の動きがみえる。“Jam la tempo iri al domo,



“*Es la venanta Sabato*” と私達は“私達の言葉”で別れの挨拶をする。一人になると私は爽快な気分を覚えた。「快よく仕事をしたあとのこの疲れ」というか——全く快よい解放感である。ふと私の前を見覚えのある多くの人々のゆくのが見えた。今しがた別れた筈の人々もいる。そうしてそれらの人々はゆつくりした歩調で思い思いに歩いているのにみんな一つの方向に向いている。漠然としてはいいるが、巨大なものがその彼方から「人々」を魅しているようにも思われる。次第に「人々」の数がふえてくるようだ。突然、何かしら絶大なる莊觀がこれから見えるのだというような気持ちしてきた…………… (20, Junio)

## KOREGON !

山本 昭一郎

KORO には二つの意味があります。Vortaro を手にとるまでもなく、それが“心臓”と“心”とを意味していることにすぐ気づかれる筈です。これに接尾辞-eg-がつくとどんな意味になるでしょうか？この際私の希望としては少々こがつけですが、“強心臓”と“寛大な心”という意味にとってほしいのです。さもないと、今私の書いているこの女の首尾が一致しないのですから。

私がこの Gazeto を発刊しようとした動機は、私達の Esperanto が現在のままで放置されては、早晚、私達の温かいサミデアーノとしてのつながりも絶たれてしまい、私達のエスペラント協会にも、やがては無気力と沈滞が侵入してくるということへの危惧から、今のうちに私達のつながりをたしかるものにしよう。そのためには Gazeto を作る方がいい、ということからでした。Titolo をみても分かるように、Literatura gazeto としてあつて、Organo としてはありません。私は、Gazeto を作りたいのです。協会のエスペラント活動を報道する Organo ではなく、あくまで Esperanto をたのしみ、夢を托するものとして

の文藝的なGazetteであってほしいのです。ですから、これはその内容と規模から、今北海道のものにしたいとさえ思っているのです。Literaturaといつても、別に厭みすることはありません。こゝでは、テクニクや洗練よりも、雄気やユーモアが珍重されるのです。

中国人は英語の会話など、非勤に早く上達するといわれています。その秘訣としては、自分の発音がたとえ不完全でも、間違っているでも、彼等は平気で英国人などと会話ををつける。そのため、寧ろ早く会得する。私達日本人の一般的風習として、又に笑われる様なことはすまい、という執念とところがあり、とがく引込思案になり勝う存のです。間違ひをする位ならばひたすらやらぬがまし、という考えがある限り私達はいづれでも上達しないでしょう。私達は、中国人的な「強心臓」をもって、未達の間にばかりでも強引に善用化するべきだと思います。間違っているでもいい。上手でなくともいい。Espはあくまでも手段なのだから、Esp-istoとしてその精神(Esperantismo)に於て固然とするところがなかつたならば、やはり立派なEsperantistoだと思ふ。もちろん少しづつでも上手になつてほしい。木葉を自覚する人々も「強心臓」をもってどしどし投稿して下さい。古くからやつている先輩の方達も、無駄に年をとつてはいいないといふことゝ、思いあがつた若者達に示して下さい。まだ、些細な文法上の誤りやら、不馴れによる編輯印刷の不手際やらは、「寛大な心」をもって見逃してほしいのです。しかし、あまやかしてほしくはありません。好意ある助言は歓迎します。どしどし投稿して下さい。

(20, Junio)

### 投稿規定

- Japaneseなら原稿用紙で、しめきり 毎月廿四火曜日迄
- Esperanteなら綴字をはっきり、提出先 ○山賀方 O.E.A. せいけい
- いづれも読み易く書いて下さい。 ○山本

## AKACIO の樹蔭から

花園凡太郎

芥川の読書力は、とても猛烈であつたようだ。彼は、四五人の来客を相手に談話乱舞しながら新刊の雑誌を読むことができたということだ。彼は英文なら一日に平均五六百頁の本に於て読んだそうだ。生前の或る年、京都に住む谷崎潤一郎を訪問するのに、日本橋の丸善本店で、英文の新刊書を四五冊買って、急行列車に乗り込み、京都駅に着くまでに全部読み終つて、谷崎から更に幾冊かの本を借りて読んだと言う Epizodo が残っているほどだ。

その芥川が、東京帝大の英文科を卒えて、横須賀の海軍機関学校の英語教官となつた時、一番困つたのは生徒の英作文であつたようだ。どんな下手な英作文でも、彼がテンサクの手を加えると生きてくるので、珠点に非常に苦労したと言ふのだ。他の英語教官は、公式時の英語の型にはまっていな生徒の英作文には、遠慮なく劣点をつけるのだが、芥川にはそれが出来なかつた。つまり芥川の頭には、海軍の学校の教官として、英語の智識が余りに豊富であつたのだ。

近頃、高校の生徒の読書力は概して低下していると言う事を耳にするので、芥川のことを書いてみた。いま各学校で取り上げている、Oral methode では、話すことや聞くことは良くできて、読書力は余り増進しないと言ふことだ。もち論、語学を学ぶには読み、書き、聞くの三拍子が揃はなくてはならぬのだが、いまの一般的傾向として、兎角読むことが閑却されているように思はれるので、こんなことを書いてみる氣になつた。

Esp. の学習についても同様のことが言い得るのではあるまいか。話したり書いたりするためには、先づ第一に、読書することが最も肝要であると思う。大いに読んで、大いに書いたり、話したりしたいものだ。

(28, Junio)

## 私はエスペラントを信仰して居ります 土田虎幸

信仰と云う言葉の持つ厳格な意味は到底知る由もありませんが私流に解釋して言うなら、エスペラントは私の信仰です。死んど狂信的なと言つても良い程の信仰をいただいています。かと言つて決してその武道のために日夜血の滲むような精進など決してしては居りません。求道とか、探求とかいつた面からすれば私は全くの怠け者です。似非信者です。にも不拘私は敢てエスペラントは私の信仰であるといいたいのです。何故でせう、何故だか私自身にもはっきり分らないのです。ただ、エスペラントで云うホマラスも、所謂人類主義ですね。それが此の上もなく美しく立派なもののように思はれるのです。ただそれだけなんです。其の主義に就いて詳しく説明を求められたとしても、皆が納得の行くようには説明出来ないのです。私にはただ美しく高貴に見えるというだけの理由なんですから。だから、狂信的というより盲信的といった方が当てているかも知れません。私のそんなあやふやな態度はこっぴどく非難もされ、輕蔑もされるでせう。しかし私には何にも抗辯のよりどころとするものはありません。ただ顔をあからめてうつむいているだけなのです。しかしやつぱり私は自分自身に言い含めるように心の中で繰返し繰返し言うでしょう。「それでも自分は信仰しているんだ」と。

ただ私が一番さびしいのは、私の信仰の云々に就いてではなく、エスペラントそのものについての非難を聞くときです。或は言語學的にどうの、或はそれをもつて平和の樹立などおぼつかないの、そんなものは暇と金のあるブルジョア趣味の人間のやることだの、等。この他色々の悪口を耳にするのですが、目下の所ではただ奇々するばかりで、理路整然とやり返す力を持たないのです。これも先程申しましたように本当の理解の上に立たない盲信の結果から、こんな不快な情けない思いをしなければならぬのではないでせうか。

## Novaj gesamideanoj に望むもの

前田 幸一

Novaj Esperantistoj に何をのぞむか? と題はこういうのです水ぬ。  
私として貴方達に望むべきことは、唯、熱心な Esperantisto になつてほしいということです。勿論 kurso を開いて居る以上これが目的であることは言をまちませんが、私としては貴方達がただ Esperanto に興味を持ち、たとえ aktiva でなくともよいから、わが中立の言語を思想的に、又実用的に支持する者になつてほしいのです。ところが、ただこれだけのことが実際には中々実行し難いものとみえて、熱心に根柢よく続ける人は極く少ないような状態です。その原因らしきものを僕の考えのただけでも述べてみませう。

第一に Esperanto の文法があまりにも簡単すぎるということなのです。勿論私のやうな無精者には文法はなるべく簡便なものの方が面倒がなく都合がよいくらいなのですが、向学心にもえる学生諸君にとって多少々強合がないらしく、文法 16 箇條を修めるとあとは唯単語だけと考へて、元晴れ奥義を究めたつもりでそれつきりにしてしまうといったやうな傾向を散見するのですが、私の考へでは難しいばかりが良い言語でないので易しくすんですぐ實際に使える言語こそ最もすぐれたものと思います。まして kurso 16 箇條 などはほんの初歩にすぎないので、Esperanto を完全に身につけるには相当の期間を必要とするのですから、決して途中で投出さず根柢よくやって頂きたいと思つて居ります。

第二に Esperanto の 思想です。Esperanto を Esperanto だらしめて他の自然の言語と區別して居ますのは実にこれあるがためです。この、平和、平等、博愛の思想こそはエスペラントの中核をなすものなのです。これを除けば、エスペラントなんて単なる欧州語の合成に過ぎないのですから。ところが、これが往々にして novaj gekursanoj の心に適はんらしい。こんな緊迫した世界状況の中で、しかも明日にも我々の郷土が戦場と化し、その巻添えを食つてあの世に行くやうなことに

もなりかねない世の中にそんな夢物語のやうなことを言つて居れるかといふのです。實際、人間である以上はたしかにさういふ気持ちにもなりません。しかし、状態が悪化すればするほどこの戦争を防止しやうと言ふ思想は必要、且重大な存在となつて来るやうに思います。

第三に Esperanto の將來性や、又、現今の日本では他の言語に比してあまり社会的に實用されてないと言ふことです。勿論極く近い將來、これが世界的公用語として採用され、ニヶ国以上の人種の会話では大抵エスペラントが用いられるやうになるとは思いません。国際会話の唯一の公用語が採択されたとしても、ある特定国の言語がこれに指定されるやうな場合も考へられます。しかし最後にはエスペラント若しくはこれに類似した性質の言語が用いられるだらうと思ひます。なぜなら各民族の民族意識などといふものは決して特定国の國語に服従し去るものではないと思ふからです。今のところ日本ではエスペラントに年期を入れたところでこれで飯を喰ふといふわけにはいきません。大抵の言語はその課程を終了すれば死状といふのがあつて、これが社会に於ける生活の上に大いにもの言ふ場合があるのですが、エスペラントにはこれがありません。なんにもならないものなら何を苦勞してすることがあらうか、時間と紙と手間の浪費ではないか、といふのです。しかし兇惡な行爲の外は泥棒しない限り世の中にはして悪いといふことはないはずですし、やれば一通りエスペラントを修めたことになるのですから決してそのやうな浪費等といふことはあり得ませんし、又將來どんなことで役立つかも知れません。とにかくすればそれだけのことはあるのですからね。

第四に Esperanto 主義者は共產主義者なりとする世間の誤解です。私達は何も格別に共產主義者をも嫌ひするのでもなく、又兇惡なものも思つて居りませんが、どうもこの混同されるには甚だ迷惑して居ます。反共的な國家にも共產主義者があるやうに、中立言語であるエスペラントの支持者にも共產主義者は居ります。しかし共產主義と Esperantismo とは全く別なものですから何もそのやうな誤解を氣にすることはありません。堂々と公言するがよろしい。

以上エスペラントを貴方處に支持して頂きたいと思ひましてエスペラントに関する気の付いた点を述べてみました。貴方處のエスペラントに對する考への参考の一つともなれば幸いです。

(30, Junio)

## エス語の慣用語句

早川 昇

山賀先生から以前拝借した雑誌(誌名失念)に、「ミグトジブロック・アノナより」として、エス語の慣用語句の対訳を連らねたものがあつた。私はそれを読ませて頂いて、その要領を得た取りまとめ方に、惚れ惚れとした。そして、早速其れをノートに写し取ると、四五日経て、毎晩お念佛のように誦唱したものである。

其の一部は、既に、本年のケ、クルサーノイに写し取つて置いて頂いたが、少し私の書き並べ方に拙い所のあつた處が悔やまれるので、今茲に、全体を載せる事にする。以つて学習の間、座右の兄姉とせられたいと希う。

### A 群 (相關的な意味の表現)

$\left. \begin{array}{l} \hat{c}u \sim a\ddot{u} \\ \hat{c}u \sim \hat{c}u \end{array} \right\} = \sim \text{であろうと} \sim \text{であろうと。}$

$\hat{C}u \text{ vi bonvolus} \sim i \text{ al mi?}$   
 = 私に  $\sim$  して下さいませんか?

$jen \sim, jen \sim =$  或いは  $\sim$  し、或いは  $\sim$  する。

$ju pli \sim, des pli \sim =$   $\sim$  すればする程益々。

$ju pli \sim, des malpli \sim =$   $\sim$  すればする程益々  $\sim$  せぬ。

$kiel ajn \sim =$ 
 $\left\{ \begin{array}{l} \text{大変} \sim \text{ではあるが (kvankam tre)} \\ \text{たとえ大変} \sim \text{でも (eĉ se tre)} \end{array} \right.$

unoflanke ~ aliflanke ~ = 一方では ~、他方では ~。

tia ~, ke (kia) ~ = { 非常に ~ なので。  
~ するような。そんな

tial ke ~ = { ~ する故に。  
~ の理由で (= ĉar)

tiam ~, kiam ~ = ~ の時、其の時に。

tie ~, kie ~ = ~ の処に、其処に。

tiel ~, ke (kiel) ~ = { 非常に ~ なので。  
~ な程、其れ程。  
~ と同様に。

tiom ~, ke (kiam) ~ = { ~ する位も。  
~ する丈、其れ丈。  
~ 程。

tuj (post) kiam (tiam) ~ = ~ するや否や。

ne nur (sole) ~, sed (ankoraŭ) ~ のみならず、又 ~ も。

unu(j) ~ aliaj ~ = 一つは ~、他は ~。

## B 群 (副詞的意味の表現)

al via dispono = お勝手に。

ankoraŭ ne = 未だ ~ せぬ。

antaŭ ĉio = { 何よりも先に。  
先づ以て。

antaŭ nelonge = { 少し前に。  
先日。  
近頃。

apenaŭ ne ~ = 幸うじて ~ せぬ。

ĉiam pli kaj pli = 一層

de kiam ~ = の時以来。



de kie = 何処から。 de tempo al tempo = 時々  
de komence = 始めから。 de tiam = 其の時から。  
de nun = 今後。 des pli = 一層

en la lasta tempo = 最近。

en la okazo } = 其の場合に。  
en tiu okazo }

escepte se ~ = ~でなければ。

ĝis kiam = 何時まで。

inter aliaj = 就中。

ĝis nun = 今まで。

iom post iom = 少し宛。

jam delonge } = 既に久しく。  
jam de longe }

jam ne ~ = もはや~せぬ。

jam neniam ~ = もはや決して~せぬ。

jam sen tio = 其れが無くとも既に。

je la unua fojo = 初めて。

jen kial } = 其れだから。  
jen pro kio }

jes aŭ ne = イエスか、ノーか。

ju pli ~ = ~すればする程。

kapon antaŭen = 向う見ずに。

kapon malsupren = 真逆様に。

kiam ajn = 何時でも。

kiel ankaŭ = 並びに。

kiel eble plej (pli) ~e = 出来るだけ~に。

kiel ekzemple = たとえば。

kiel jene = 次の如く。

kiel kutime = 常の如く      kio ajn = 何んでも。  
kien = 何処え。      kiu ajn = 誰れでも。  
kien) ajn = 何処(え)でも。      Krom tio = 其の他。  
la tundo supren = 逆様に。  
laŭ la lasta modo = 最新流行で。  
laŭ mia opinio = 私の考えでは。  
laŭ ŝajno = 外見上。  
laŭ via fontro }  
laŭ via plaĉo } 御随意に。  
malgraŭ ĉio = 結局。  
mano en mano = 手に手を取って。  
meti sur ~ = ~ の上え載せる。  
meti en ~ = ~ の中え入れる。  
ne tre ~ = 大して ~ でもない。  
ne tutè ~ = 全く ~ ではない。  
neniam plu ~ = 最早決して ~ せぬ。  
okulo al oklo = 向い合つて。  
paŝo post paŝo = 一歩一歩と。  
per unu foje = 一度に。  
plej malfrue = 遅くとも。  
pli (aŭ) malpli = 多かれ少なかれ。  
pli (aŭ) malpli frue = 遅かれ早かれ。  
pli kaj pli = 益々。  
plu ne = 其の上 ~ せぬ。  
per la lasta fojo = laste = { 最後に、  
   { 最近に。

(por) { ĉiam = 永久に。  
          { eterne

same kiel ~ = ~ と同様に、

se ne = そうでなければ

se tamen ~ = 尤とえ ~ なりとも。

sub la planko = こつそりと。

sub via dispono = 御勝手に。

stupo post stupo = { 少しづつ、  
  { 段々に。

tial { ĉar = ĉar = { 何んとなれば、  
      { ke           { ~ なる故。

tiamaniere, ke ~ = そんな風に、

tiamaniere ke ~ = ~ の様に

tie kaj (aŭ) { ĉi tie = あちこちに。  
              { aliloke

tiel nomata = 所謂。

tien = 其処え。

tien kaj reen = あちこちえ。

tio estas (= t. e.) = 即ち。

tiu aŭ alia = { それかあれかと。  
                  { 何かと。

tute ne ~ = 全然 ~ ぬ

unu { al (la) alia = お互いに  
      { (la) alian

unu sur alia = 一つを他の上に、段々に。

unuiĝi post aliaj = 相次いで (続々と)。

unufajlon por ĉiam = 永久に。

vizaĝo kontraŭ vizaĝo = 向い合つて。

volu nevole = 否定的に。

〔群羊 (前置詞的な意味の表現)〕

antaŭ ol ~ = { ~より先に。  
~せぬ内に。

apude de ~ = ~の傍に。

ĉirkaŭ de ~ = ~の附近に。

dank'al ~ = ~のおかげで。

daŭre de ~ = ~の間。

de ~ ek = ~から始めて。

de kiam = ~以来。

de post ~ = ~の後から。

eĉ se ~ = たとえ ~ でも。

ek de ~ = ~から始めて。

eke de ~ = ~から。

en komparo kun ~ = ~に比べて。

en la daŭro de ~ = ~の間。

en la interno de ~ = { ~の内部に(所)。  
~以内に(時)。

en la mezo de ~ = { ~の最中に(時)。  
~の真中に(所)。

en la nomo de ~ = { ~の名に於て。  
~を代表して。

en la okazo de ~ = ~の折りに。

escepte ~n de ~ = ~を除いて。

flanke de ~ = { ~の側に。  
~にとって。

for de ~ = ~ から離れて遠く。

ĝis kiam ~ = ~ の時まで。

inter de ~ = { ~ の内部に(所)。  
~ 以内に(時)。

iom da ~ = { 少しの ~。  
いくらかの ~。

kaŭze de ~ = ~ のために(原因)。

kelke da ~  
kelko da kelkoj ~ } = 数個の ~。

komence de ~ = ~ の初めに。

kiel se ~ = kvazaŭ ~ = 恰かも ~ であるかの如く。

kompere kun ~ = ~ に比べて。

koncerne { al ~  
n ~ } = ~ に関して。

kondiĉe de ~  
kondiĉe, ke ~ } = ~ の条件で。

konforme al ~ = ~ に応じて。

konsekvence de ~ = ~ の結果として。

konsente kun ~ = ~ に同意して。

konsidante, ke ~ = ~ を考慮して。

kontraŭe de ~ = { ~ の向う側に。  
~ と相対して。

kontraŭproporce al ~ = ~ に逆比例して。

kun escepto de ~ = ~ を除いて。

kun la kondiĉo, ke ~ = ~ の条件で。

kun la preteksto, ke ~ = ~ を口実として。

kune kun ~ = ~ と共に。

laŭtio se ~ = ~ かに従って。

laŭ longe de ~ = ~ に (縦に) 沿つて。

malgraŭ (tio) ke ~ = ~ にも拘らず。

malproksime de ~ = ~ の遠くに。

memore de ~ = ~ の記念のために。

meze de ~ = { ~ の最中に (時)  
~ の真中に (所)

multe da ~ = 多くの ~。

ne malpli ~ = ~ に劣らず。

okaze de ~ = ~ の折りに。

per helpo de ~ = ~ の助けにより。

pere de ~ = ~ によつて (手段・媒介によつて)。

plenbuŝo da ~ = 口一杯の ~。

pli (i-multe) da ~ = もっと多くの ~

por ke ~ = ~ する為めに。

post kiam ~ = ~ した後に。

pretekt (ant)e, ke ~ = ~ を口実として。

pro la bono de ~ = ~ の (幸福) のために。

pro manko de ~ = ~ の欠乏の為めに。

pro memoro de ~ = ~ の記念のために。

pro tio ke ~ = ~ したせいで。

proksime { de = ~ の近くで。  
al

proporce al ~ = ~ に比例して。

rilate al ~ = に関して。

same kiel ~ = ~ と同様に。

se tamen ~ = だつて ~ たりとも。

simile al ~ = ~ に似て。

sub de ~ = ~ の下に。

supozinte ke ~ = ~ と仮定して。

tiamaniere ke ~ = ~ という風に。

tuj (post) kiam ~ = ~ するや否や

以上 (3. Julio)

Salutletero al Prof. D-ro Ed. Privat, Svisujo

---

Otaru, la 15-an de Junio, 1952

Estimata Profesoro,

Mi havas la honoron saluti vin en la nomo de Otaru Esperanto-Asocieto, filio de Japana Esp.- Instituto. Niaj asocianoj ĉiuj unue legis vian malnovan verkon " Karlo " kun intereso kaj emocio. Post la elementa kurso oni komencis lernadon de nia lingvo per via amata verkaĵo kaj entiu momento ni ĉiuj konas vin kaj respektas vin kaj eĉ sopiras vian nomon.

Hazarde oni trovis vian artikolon " Antikva Pacifisto, la Hinda imperiestro Aŝoka ", aperinta en tiu ĉi januara numero de " Esperanto ", organo de U.E.A.

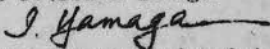
Cetere ni konservas unu libreton kun bildoj, titolata: " La Admono kaj Vivo de Reĝo Aŝoko ", tradukita de s-ro R. Okazaki ( eldonita en 1937, Kioto, Japanujo ). La tradukinto s-ro Okazaki estis juna budaisma bonzo kaj samtempe fervora esp. samideano en nia urbo Otaru. Tamen mi bedaŭras, ke li jam mortis pro malsano antaŭ jaroj. Nur lian postlasitan verkaĵon oni konservas ĉe ni.

Viante vian artikolon pri Reĝo Aŝoko, ni tre interesiĝis kaj ĝojis kaj deziras donaci tiun ĉi memora<sup>n</sup> libreton al nia estimata profesoro, aŭtoro de nia amata " Karlo ".

Bonvole akceptu nian malgrandan peton kaj saluton. Ni estas ĝoja kaj honorinda, se ni nur povos ricevi vian propran skribaĵon,

Sincere via ,

D-ro Isami Yamaga



Estro de Otaru Esperanto-Asocieto  
Delegito de U.E.A.